2014年6月1日　礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記5章1〜12節

説教：ご自分の民のために

1　ダビデがイスラエルの王となる

サウルが倒れた後、その後を継いでイスラエルの王となるのは誰なのか、人々の意見は真っ二つに分かれていました。ダビデが王となるべきだと考える人たちがいました。一方、サウルの家から王を出すべきだと考える人も大きな勢力を持っていました。二つの家の間で衝突が繰り返されます。血が流され、人が死んでいきます。

そんなとき、サウル家に仕えていた将軍アブネルが大きな転機をもたらします。彼は、主がダビデをイスラエルの王に定めていることを信仰によって確信し、イスラエルの長老たちを尋ね、ダビデを王にするようにと説得を続けます。ところが、さあこれからだという一番大切な時期に彼は暗殺され、志半ばで倒れてしまいます。和解のムードは一気にしぼみ、ダビデの家とサウルの家との間に不信が渦巻きます。そんな中、ダビデは、アブネルの死をいたみ、その墓の前で声を出して泣き、アブネルの亡骸を丁寧に葬りました。

イスラエルの人々はそんなダビデの姿を見たとき、彼こそイスラエルの王となるべき人物ではないかと考え始めます。2節でこう言っています。「しかも、主はあなたに言われました。『あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがイスラエルの君主となる。』」あれだけダビデが王となることに反対していた人たちの心が変えられた瞬間でした。イスラエルは大きな一歩を踏み出します。ダビデは天下晴れてイスラエルの王となります。

ところで、今日のところで一箇所、かなり引っかかりを覚える所があります。8節です。そこを見ながら、ダビデがイスラエルの王となったのは、どんな目的からだったのかを考えていきます。

2　「ダビデが憎む、目の見えない者、足のなえた者を打て」

1）差別なのか？

ダビデは、これまで住んでいたヘブロンを離れ、エルサレムに移り住むことにします。ところが、そこにもとから住んでいたエブス人は要害を築いてダビデがくることを拒みます。

今、この要害は遺跡として保存されており、だれでも見学することができるようです。がけに大きな石を積み重ね、まるで城の壁のようになっています。要害の上からは石を投げ落とすができるので、下の方から近づくことが非常にむずかしい。そういう構造です。エブス人はかなりの自信があったようです。「目の見えない者、足のなえた者でさえ、あなたを追い出せる」と言ってダビデをあざ笑っています。

これに対し、ダビデはどうしたか。第一歴代誌11章にはこのあたりのことが詳しく書かれています。それによると、ダビデは兵士たちに「だれでも真っ先にエブス人を打つ者をかしらとし、つかさとしよう」と呼びかけ、志願する者を募ります。この呼びかけに応じたのが、ヨアブという人で、彼はかなりの知恵者だったのでしょう。この要害を攻め落と

してしまうのです。

さて、問題はここからです。8節にこうあります。「その日ダビデは、「だれでもエブス人を打とうとする者は、水汲みの地下道を抜けて、ダビデが憎む、目の見えない者、足のなえた者を打て」と言った。このため、「目の見えない者、足のなえた者は宮に入ってはならない」と言われている。」

皆さんどう思いますか。教会の入り口に、「障がい者入るべからず」などという張り紙をしたら大変な問題になるでしょう。ここだけ読めば、ダビデは障がい者を差別しているようにしか見えません。これはどういうことか。そのことを考えましょう。

2）メフィボシェテ

まず最初に、ダビデは障がい者をどう見ていたのか、そこから確認します。前回の箇所に戻りますが、4章4節にメフィボシェテという人のことが出ておりました。この人は、ダビデの一番の親友であったヨナタンの息子でしたが、小さいときに事故に遭い、それ以来「足なえ」と言って、足の不自由な障がい者となってしまいます。

ダビデは、このメフィボシェテにどう接したか。9章に出て来ます。ダビデは、メフィボシェテを呼び寄せ、まるで自分の息子のようにしていつも一緒に食事をするのです。足のなえた者が宮に出入りしていたことになります。決して、障がい者を差別したりはしない。自分は王であると言って威張りちらすのではなく、大きな権力を手にしても、弱い者に心を配ることを忘れたりはしません。それがダビデです。

ダビデは目の見えない者や足のなえた者を憎んだりはしていません。であるならば、8節をどのように理解したらよいのでしょう。

3）信頼があるから言えることば

皆さんはこんな経験をしたことがあるはずです。非常に気心の知れた親しい友人に対して、こんなことを言うのです。「私はあなたのことが大嫌いです。」もちろん本気で言っているのではなく、冗談で言う。相手も笑いながら受けとめてくれる。「嫌いだ」と言ってもそれが本音でないことを相手が理解してくれるという深い信頼があるので、言える。本心とは反対のことを言うことで、かえって信頼関係が増す。考えてみると、実に高度なコミュニケーションですが、そういうことがあります。

8節もそのように考えるとわかりやすいと思います。ダビデは本気でこのことを言っているのでありません。ダビデが目の見えない者、足のなえた者にどれだけあわれみを注ぐ者であったのか、周りの人たちは十分知っているのです。「私は、目の見えない者、足のなえた者は嫌いだ」と口で言っても、真に受ける人たちはだれもいない。みな、笑って聞き流してしまう。それくらいダビデと周りの人たちの間に信頼関係がある。

ダビデは決して障がい者を差別しようとしているのではない。むしろ、心に留める人であったからこそ、自信をもって言えた。そのように理解していただきたいと思います。

4）エブス人

障がい者のことは、これで納得できました。けれどもまだ問題が残っています。エブス人のことはどうなのか。やっぱりダビデはエブス人を嫌っていたのかどうか。エブス人は、

要害を築いてダビデの行く手を妨害したのですから、当然ダビデはエブス人を嫌っていたはずである。ダビデは、自信過剰であさはかなエブス人をあざ笑うために、8節のような言葉を語ったのだろうと推測してしまいます。

実際はどうだったのか。第二サムエル記の最後に出て来るのですが、ダビデはある事情によってエブス人が所有していた農地に祭壇をつくる必要に迫られたことがあります。エブス人が敵であるならば、武器を使って強制的に召し上げるはずです。ところが、ダビデはエブス人の農民に頭を下げ、お金を払って土地を買い取る。非常に丁寧なやりとりをするのです。言ってみれば、立派な服を着たイスラエルの王様が、田舎に出向いて行き、作業服を着て働いている親父に対して頭を下げている。そんな姿です。もしエブス人が敵であると思っていたのなら、絶対にそんなことはしない。ダビデは、エブス人も自分たちの仲間であると考えています。救われるべき人たちであると考えています。

もう一度8節に戻ります。8節はエブス人をあざ笑って言ったのではありません。もはやエブス人は敵ではないのです。ですから、エブス人を打つ者はだれもいません。ダビデが、目の見えない者や足のなえた者を憎むはずもない。結局すべて、ありえない話。笑い話だったのです。

ただの笑い話ではないと思います。エブス人は、イスラエルから見れば異邦人ではあるけれど、彼らにも救いの恵みは拡がっていく。ダビデはそんなことまで意図して語っているように思えてなりません。

3　ご自分の民のために

ダビデはイスラエルの王座に就きます。そのことを聖書がどのように記しているのか、最後に確認します。12節。「ダビデは、主が彼をイスラエルの王として堅く立て、ご自分の民イスラエルのために、彼の王国を盛んにされたのを知った。」

いったいなんの目的でダビデはイスラエルの王となったのでしょう。ダビデの長年の苦労が、努力が報われたということか。ダビデの功績ということか。まったくそんなことは書いていない。「ご自分の民イスラエルのために、彼の王国を盛んにされた」とあります。ダビデが王になることが目的なのではありません。神はどこまでも、ご自分の民イスラエルのことが心配なのです。ご自分の民を救い、守ることが最優先。ダビデがイスラエルの王となるのは、ご自分の民を守るため。そういう順序です。

かつてダビデが人々を笑わせるために語った冗談。その冗談の言葉も、実は、ダビデの子として、ダビデの時代からおよそ千年の後に主イエス・キリストのことを預言していたことに気がつきます。

ダビデから時代が経ると次第に 8 節の言葉は誤解されるようになります。それで、目の見えない者や足のなえた者は宮には入れなくなっていきました。

主はどうして下さったのか。マタイの福音書21章14節にこうあります。「宮の中で、盲人や足のなえた人たちがみもとに来たので、イエスは彼らをいやされた。」

ダビデは、障がい者を宮の中から追い出そうとしていたのではありません。主は、弱い者をこそ、ご自分のところに招こうとされる方です。そのために主は、イスラエルの王としての冠を捨てられます。ご自分の民のため

にはご自分のいのちさえお捨てになりました。主の歩まれた道は、すべてがご自分の民のためであったことを思い起こしたいと願います。